

島・伴編1988)。さらに県道国見雲仙線改良工事に伴う調査では7基の炉穴が検出されている(田川編1994)。

(4) 若干の考察

本県の炉穴について、まとめた記述を行ったのは副島和明である。副島は鷹野遺跡の報告書のまとめの中で、検出した集石遺構と炉穴遺構に「石蒸しの調理用炉址としての用途が窺われ、相互に補完する状況」を想定し、具体的には「炉址に用いる礫石を焼く場所と調理用の炉址」であると推定した(副島・伴編1986)。広久保遺跡でも炉穴から約3mほど離れて集石遺構が検出されている(第10図)。このように、集石遺構と炉穴をセットとする考え方は現在も一部の研究者にはあるようである。これに対して、栗田勝弘は「炉穴と集石炉の配置を同じ条件で別の角度から眺めれば、両者が遠距離に遺存する例が多い」として、両者をセットとする説を批判している(栗田編1983)。先述した緒方勉も「焼礫する手法にはわざわざ土坑を掘開する必要があるのだろうかの疑問がある」として否定的である。最近の研究状況を踏まえると、集石遺構と炉穴がセットで機能することを積極的に支持することはできない。

さらに副島は平遺跡の報告書のなかでも、県内の炉穴遺構を検討している。そこでは炉穴の形態による分類を試みている。それによるとI類(楕円形状の掘り込みをもつもの)、II類(煙道をもつもの)、III類(円形を呈するもの)の3形態に分類し、I類は大きさによってさらに2つに細分している。そして各遺跡から検出された炉穴を先の分類にあてはめているが、そこにはそれぞれの類型に属する炉穴の基数のみしか示されておらず、具体的な分類基準や、どの遺跡のどの炉穴がどの類型に入るのか明記されていないのが惜しまれる。

また各類型の所属時期についても触れてはいるが、報告書の記述のため、簡潔な表現となっている。報告書を読む限り、I-a類の一部とII類は新しく、早期中葉から後葉にかけてのものと考えているようである(副島・片山編1983)。

広久保遺跡の炉穴の発見によって今後、県北部での開地遺跡の調査でも炉穴が発見される可能性がでてきた。広久保遺跡で検出した煙道付き炉穴は子細にみると炉穴の主軸に対して、2つの土坑の長軸が直交するという形態である。南九州の集成資料を見る限り、主軸に対してそれぞれの土坑の長軸が平行するものがほとんどで、広久保のように直交する例はみられないようである。今後資料の増加を待って検討すべきことであろう。

(5) 煙道付き炉穴の年代について

煙道付き炉穴の埋土からは若干の細片の土器が出土したが、型式がわかるものは手向山式土器と思われる山形押型文土器が1点のみであった(第21図9)。手向山式土器の編年的位置は早期中葉末といわれる。また炉穴の埋土の放射性炭素測定年代は9480±80yBP(補正¹⁴C年代)で、従来いわれている早期中葉の実年代観よりも約2000年ほど古い結果がでている(附編)。広久保遺跡の煙道付き炉穴は出土土器や検出状況からみて、手向山式土器の段階である可能性が最も高い。しかし¹⁴C年代のみとりあげれば広久保遺跡の煙道付き炉穴も早期前葉のものでよいことになる。南九州の煙道付き炉穴の所属時期が早期前半ということとも矛盾しない。したがって現時点では広久保遺跡の煙道付き炉穴は、早期の段階であることには違いないが、¹⁴C年代が示す早期前葉なのか、手向山式土器の段階である早期中葉末であるのかについては結論を留保せざるをえない。

第2節 手向山式土器について

(1) はじめに

広久保遺跡の調査では手向山式土器の資料を比較的まとまった形で得ることができた。器形など、

全体が復元できるものはないが、長崎県北部の調査では初めて出土した土器型式である。かつては文様が轟式土器や曾畠式土器に類似するため、縄文前期に編年されることが多かった土器であるが、1980年代以降に広域火山灰の研究が進むなかで、早期中葉に編年されるようになって現在にいたっている。ここでは手向山式土器の研究史を概観し、長崎県の状況も踏まえながらまとめてみたい。

(2) 手向山式土器の研究状況

手向山式土器についての研究史は横手浩二郎の論考に詳しいので(横手1998)，詳細はそれに譲るとして、ここでは手向山式土器の最近の研究状況をまとめておきたい。

手向山式土器が押型文土器終末の型式であることは、まず異論のないところであろう。しかし、その系譜や消滅過程ならびに、その細分については今後の研究に待つところが大きいのも事実である。

まず系譜の問題であるが、最近の研究は手向山式土器の成立を西日本の押型文土器段階末期の動向との関連でとらえようという傾向にある。

坂本嘉弘は「高山寺式土器に見られる広域分布土器」と南九州の貝殻文系円筒土器が接触した結果、手向山式土器が発生したとした(坂本1995)。さらに坂本は「刻目のある突帯と幾何学的な沈線文や微隆起線文」のような文様は「東九州の押型文土器の伝統の中には見られない」として「沈線文や刻目のある突帯文」が施文される南九州の貝殻文円筒形土器からの影響を説いている(坂本1998)。

水ノ江和同は手向山式土器の微隆起線文や幾何学的な沈線文の系譜は「少なくとも九州在来の要素から求めることはできそうにない」として「田村式の次の段階の究明と九州以外の地域との関係に注意を払って行かなければならない」としている(水ノ江1998)。

次に手向山式土器の細分の問題であるが、中間研志は治部ノ上(じぶのうえ)遺跡の報告のなかで手向山式土器の細分を行っている。氏は鹿児島県姶良郡横川町星塚遺跡のⅢ類土器は「口縁外面に突帯(隆帯)を持つものや、頸部外面に凹線幾何学文を施す類が出土しておらず、この種を一つの型式として認定」できるとして、これをⅠ式とした。Ⅱ式は「隆帯文、凹線幾何学文、刺突文等の他の文様要素が後から入ってきて混合した」土器で、先のⅠ式からⅡ式への変化を想定している(中間1994)。

水ノ江和同は中間が設定したⅠ式は「刻目突帯文や特殊な押型文をはじめ微隆起線文や幾何学的な沈線文」がみられないことから、「田村式と手向山式をつなぐ」新たな型式の土器である可能性を指摘した。そして「型式学的な観点からみると、手向山式の始まりは山形文を全面に施し口縁部や胴部の屈曲部に刻目突帯文を貼り付けるタイプのものからで、口縁部内面や胴下半部にのみ山形文を施して微隆起線文や沈線文と組み合わさるタイプのものがより後出的な要素」であるとした(水ノ江1998)。

横手浩二郎は文様要素、施文部位、分布域という要素の分析をもとに、手向山式土器を3型式に細分した。すなわち1式は押型文を主文様とするもの、2式はミミズばれ文と押型文を主体的にもつもの、3式は沈線文と凸帯を文様として主体的にもつもので、これらの型式は1式→2式→3式へと変化とした(横手1998)。

また手向山式土器の消滅の問題について、横手は手向山式土器は早期中葉段階で終了し、平桟式土器につながるという考え方を支持した(註6)。

(3) 長崎県の手向山式土器

長崎県でこれまで手向山式土器が報告されたのは国見町百花台遺跡で「おそらく手向山式土器の系統か」という土器(報文のFig92-16)(安楽1994)のみである。したがって広久保遺跡は本県ではじめて手向山式をまとめて出土した遺跡といえる。細片で器形を復元できる資料がないため、細かな検討はできないが、中間や横田の研究に従えば突帯をもち沈線文をもつところから手向山式土器のなかでも新しい傾向をもつ土器群といえるかもしれない。